

☆夜間自由集会 日 時：7月31日(水)18:00～19:00

会 場：下記案内をご覧ください。

以下のテーマで行います。なお、集会によっては一部予定時間より長くなる場合もあります。

会場は当日、掲示とアナウンスでお知らせ致します。なお、会場内で飲み物を召し上がって頂くことも可能です(ゴミの分別にご協力下さい)。フリーミキサーで販売している飲み物をご利用頂くことも可能です。

自由集会1「環境化学者の海外留学・研究とキャリアプランニング」1C会場(1講23号室)

オーガナイザー: 遠藤智司(Helmholtz Centre for Environmental Research-UFZ)・落合真理(愛媛大学)

海外留学・研修は、研究者・実務者としての実力を養う上で肝要であり、さらにネットワークを構築する貴重な機会でもあります。実際、多くの先端研究はアクティブな国際研究交流により醸成されています。しかしながら、海外の大学で学ぶ日本人の数は減少傾向にあり、環境化学分野においても海外で活躍する日本人学生・研究者の数はきわめて少ないのが現状です。考えられる要因として、日本特有の就職システム、英語力の不足、海外大学を経由したキャリアパスが未確立、海外留学・研修の重要性を実感する機会が乏しいこと等が挙げられ、さらに個々人の事情(金銭面、家族構成、雇用規則など)も大きな要因であることが考えられます。本集会では、上述の点も含め海外留学・研修に関する情報・経験を参加者間で議論し情報を交換することを目的とします。学生および若手研究者の積極的な参加を期待しています。

自由集会2「福島原発事故によるストロンチウム90のモニタリングについて」1A会場(1講16号室)

オーガナイザー: 渡邊 泉(東京農工大学)・島村 匡(元北里大学)

2011年3月11日の大地震に伴う福島第一原子力発電所の事故に伴い、大量の放射性物質が環境へ放出されています。土壌、食品、海水などに対する放射性物質の汚染モニタリングが行われていますが、現時点ではCs-134,137にほぼ限定されてしまっています。昨今の報道でも明らかのように、放射能汚染水を貯留している貯水槽、タンクから汚染水は現実的に漏れ出しており、将来的にも更に大量に漏洩する可能性は否定できません。Csに関してはモニタリングの体制もかなり整いつつあり、また放出量も沈静化の方向にあるようにみえますが、Sr-90に関してはむしろこれからが問題であると考えられます。自由集会においてはSr90の今後のモニタリングに対して環境化学会の会員がどのように寄与できるか自由な雰囲気の中で議論していただければと考えています。Sr90に関する全般的状況、分析前処理、ICP-MSによる測定、β線計測などについて話題提供の予定です。興味のある方の振るってのご参加を期待しています。

自由集会3「プラスチック汚染の関連映画”Trashed”上映会」2D会場(2号館11号室)

上映責任者: 高田秀重(東京農工大学)

”Trashed”はイギリスで製作されたプラスチックによる環境汚染を扱ったドキュメンタリー映画(日本語字幕付き)です。ゴミ埋立地とその周辺の土壌・地下水汚染、焼却に伴うダイオキシン類の発生とダイオキシンによる健康影響、海洋プラスチックゴミとそれが運ぶ化学物質による生態系の汚染、プラスチック廃棄物を削減する様々な方策について紹介している映画です。本学会の会員の皆様の研究に非常に密接に関係するテーマだと思しますので、専門家の皆様からのご意見をいただければと思います、学会期間中に上映したいと思っております。是非とも、ご覧いただき、専門家の立場からご意見いただければ幸いです。

自由集会 4「もっと知りたい LC-MS 分析の問題点と解決法」 2E 会場(2 号館 21 号室)

オーガナイザー: 吉田寧子(住化分析センター)・四ノ宮美保(環境省)

第 12 回環境化学討論会(2003 年)ナイトミーティングで LC-MS を取り上げてから 10 年が経ち、この間 LC-MS を用いた多くの分析法が開発され、多くの公定法に採用されてきました。LC-MS, LC-MS/MS, TOFMS, Q-TOFMS 等バリエーションに富んだ装置が開発され、それらの性能も日々向上しています。このような状況の中で、環境試料の前処理も含む LC-MS 分析のノウハウは益々重要となり、また定量だけではない LC-MS 解析への期待も高まっています。この自由集会は LC-MS のことなら何でも話題とする集まりです。日頃の LC-MS に関する疑問珍問をこの場で議論し、解決? する楽しい一時を皆さんと過ごしたいと考えています。

自由集会 5「水源事故時の対応と水質モニタリング」 1B 会場(1 講 24 号室)

オーガナイザー: 浅見真理(国立保健医療科学院)・小林憲弘(国立医薬品食品衛生研究所)

水源となる河川等での水質事故は後を絶たちません。大震災や放射性物質による影響が落ち着いたのは 2012 年 5 月、水質基準値を超える有害物質のホルムアルデヒドが浄水場の水道水から検出され、利根川水系の浄水場で取水が停止され、約 87 万人が給水停止の影響を受ける事件もありました。水道では、原因となった前駆物質なども含め、水質基準以外でも水道に支障がある項目を危害項目に位置づけようとしています。どのような水質事故に注意すべきか、何を目的に調査することが必要か、事故時に役に立つ分析方法とは、どのような関係者の連携が望ましいかなど、様々な情報共有を行いたいと考えています。皆様の積極的なご参加をお待ちしています。